

聖母の被昇天

2017.8.15

ルカ 1・39-56

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高神父

聖母の被昇天の祝いには、独特な雰囲気を感じられます。聖母の被昇天の祝いはもちろん、わたしたちにとって大きな喜びに包まれた祝いにちがいありませんが、同時に、どこかいいよのない哀愁を感じさせるところがあります。聖母の被昇天の祝日が、日本のわたしたちにとっては、あの悲惨な戦争の歴史を思い起こさせる終戦の日と重なっているという事情もあります。けれども、聖母の被昇天の祝いが、わたしたちにどことなく哀愁を感じさせるのは、そのためだけではありません。

聖母の被昇天の祝いは、地上の生活を終えられた聖母が、御子イエスの復活の恵みに与って、天の栄光に上げられたことを祝う信仰の祭りです。わたしたちの母である聖母は、今や天に昇られ、神の栄光のうちに、御子イエスのお側近くにいてくださるのです。その聖母を母と仰ぐわたしたちは、この地上の生の中であって、天の栄光のうちにおられる聖母に祈りをささげるのです。わたしたちの母である聖母は天の栄光のうちにおられ、その聖母を母と慕うわたしたちはこの地上から天に昇られた聖母を仰ぎ見るという構図が、聖母被昇天の祝日に独特の哀愁をわたしたちに感じさせるのではないかと思われまふ。事実、わたしたちは聖母の被昇天において示されているように、天を仰いで聖母の取次ぎを願って、祈りをささげてきたのではないのでしょうか。

若い頃に洗礼を受けられた古くからの信者の皆さんは、カトリック聖歌集に集められている聖母マリアを讃える聖歌に懐かしさを感じておられることでしょう。カトリック聖歌集にあるこれらの聖母マリアの聖歌の多くは、カトリック教会に古くから伝えられてきた、天におられる聖母への信心の霊性を生き生きと表現しています。そのような聖母への信心の霊性は、第二バチカン公会議後の現代の教会においても、決して失われてしまったものではありません。天におられるわたしたちの母である聖母への熱い想いは、わたしたちがカトリック信者としてこの地上の生活を生きる限り、わたしたちの心から消え去ることはないのです。

司祭たちの葬儀においては、告別式の終わりに、列席の司祭たちが棺を囲んで、「サルベ・レジーナ」という、ラテン語の聖母賛歌を歌う習慣があります。この「サルベ・レジーナ」の聖母賛歌は、「アベ・マリアの祈り」と並んで、カ

トリック聖歌集の聖母の聖歌にインスピレーションを与えた、教会の古くからの聖母への祈りです。そして、この「サルベ・レジーナ」の聖母賛歌は、今でも教会の祈りの一日の終わりにささげる祈りの最後に歌われています。トラピストの修道院などで、寝る前の一日の最後の歌として、灯りが消され、聖母のご像だけに照明があてられる中、静かに歌われるのを聴くことが出来たら、きっと深い感動を覚えられることでしょう。

今日は、聖母の被昇天を祝うミサをともにおささげしていますので、「サルベ・レジーナ」のラテン語の歌詞に表現されている教会の古くからの聖母信心の霊性を御一緒に味わってみたいと思います。

「サルベ」という歌い出しのことばは、「アベ・マリア」の「アベ」と同じように、日本語では表現しにくい、親愛の情に満ちた挨拶の呼びかけのことばです。それに続く「レジーナ」というマリア様への呼びかけは、今や被昇天によって、全ての者を支配する王として神の右の座におられる、イエス・キリストのお側近くに召された聖母に与えられた名称です。「レジーナ」というラテン語は王という称号の女性形で、女王を意味します。聖母に向かってこのようにお呼びすることによって、わたしたちは今や、天の栄光の座についておられるイエス・キリストともに、そのお側近くおられて、わたしたちを庇護してくださる、わたしたちのレジーナとしての聖母に呼びかけているのです。そのレジーナである聖母は、文字通り、わたしたちの「マーテル・ミゼリコルディエ」です。すなわち、わたしたちの憐れみの母です。聖母の憐れみは、母親としての憐れみです。わたしたちのありようがどのようなであっても、ひたすらに、わたしたちの身を案じてくださる母としての憐れみです。その憐れみを、わたしたちは自分がどのようなところに身を落としたとしても、なお期待することが出来るのです。聖母への呼びかけはなお続きます。聖母は、わたしたちにとって、「ヴィータ（いのち）、ドゥルチェード（甘美さ）、スペス（希望）」そのものです。そのように聖母を讃えながら、聖母が、わたしたちにとって、そのようになってくださることを願うのです。すなわち、わたしたちのいのち、甘美さ、希望そのものとなってくださるよう願うのです。

これに続く、わたしたちの天のレジーナである聖母への嘆願のことばの中に、暗い人類の歴史の中を生きてきた、わたしたちの信仰の先輩たちの聖母に寄せる思いの全てが吐露されています。「楽園から追われたエワの子らであるわたしたちは、この涙の谷にあって、吐息をつきつつ、すすり泣きながら、あなたに叫びを上げ続けています。それゆえ、わたしたち全ての者が声をあげてより頼む御母よ、あなたのその憐れみの眼差しをわたしたちに向けてくださり、この地上における（肉の）囚われの時が果てる時、あなたからお生まれになった、あなたの御子イエスをわたしたちにお示しください。心広き、心清き、いとも

甘美なる乙女マリアよ」。以上が、「サルベ・レジーナ」のラテン語の祈りの要旨です。

トラピストのような観想修道会の修道者たちは一日の労働に疲れきった体を引きずるようにして、一日の終わりに、この聖母への賛歌を歌い続けているのです。司祭たちは、司祭としての生涯の終わりの休みにつく前に、聖母へのこの祈りにその生涯を託して、送られて行くのです。

聖母の被昇天の祝日にあたって、カトリック教会の信仰の遺産であるこのような聖母への信心の霊性を新たにしたいと思います。大震災の被害に見舞われ、今なおそこから立ち上がれずにいる多くの方々のことを想い、戦争の悲惨さを忘れてはならない終戦の日の聖母被昇天の祝日にささげるわたしたちの祈りが、この涙の谷からの全ての人の叫びに結ばれて、全ての者の母となられた聖母のもとに届き、わたしたち全ての者の憐れみの母である聖母に聞き届けていただけるよう、心を合わせて祈りたいと思います。